

朝夷巡嶋記

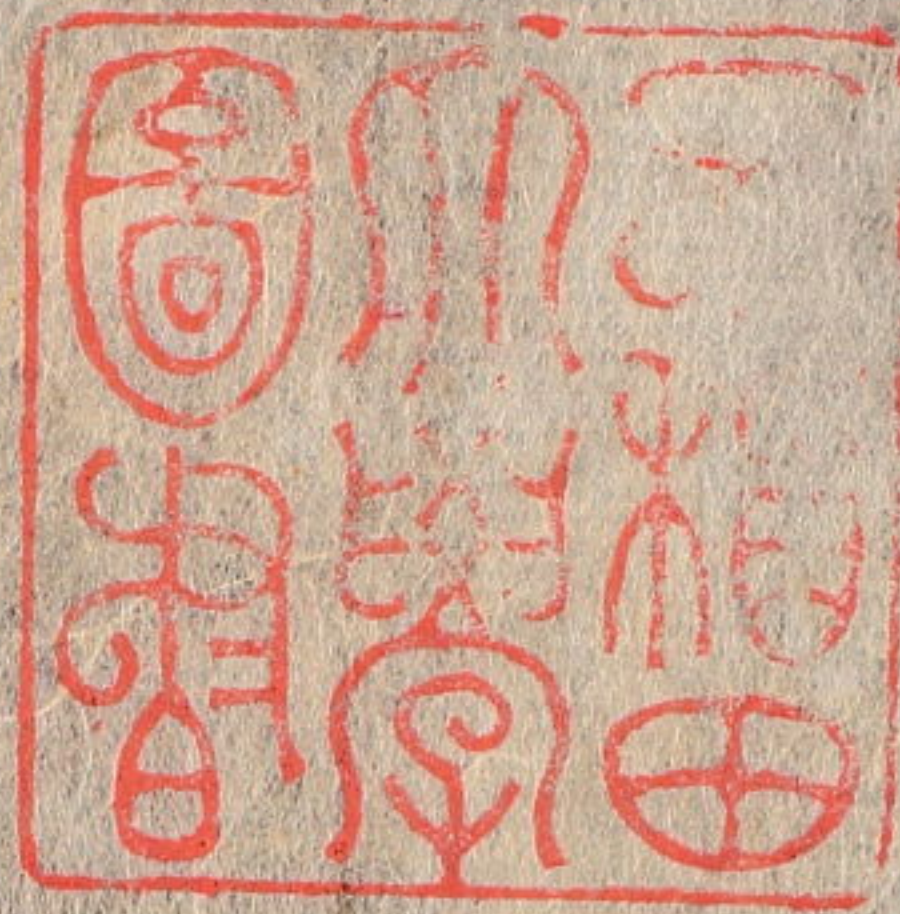
第五編
卷三

13

704

23

門 704
卷 23



明治三十八年
十月九日
購求

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之三

東都 曲亭主人編輯

後輯第四十五

孝友の亡命人
新参の老實僕

吉見冠者義邦ハ曩は在柄平太胤長ヲ抑留せしむ小袋坂の守屋あり夫婦
主從僥ふと日夜番卒より守らせ相彈慰さるるがや。○
程は外面忽地驟く只今而教書到来せしむ。○
原來よりへかへしと主從耳を側て。○
必死の覚期今や。○
更に通の書翰を懐かし。○
便是和殿夫婦ハ。○
胤長預りて在柄の宿所召置べしと仰る。江三二小

四箇の後者ハその名々えらめられ冠者と共召捕へ但蒙二郎も其
苟且は陸奥より後ハあるものあり豫て其父を家臣の四人に注し
かれは蒙二郎の限りはわが故郷へ歸去せんも其の地を在んも彼男
隨意の如く附く又下わたり朝夷三郎義秀より既に上聞は達せし則
渠を後せん為と和野新左衛門尉常盛と越中國へ遣はれ其の義秀の
果して義盛の子とあり常盛の弟とあれば離別幼稚の時かれは面
忘れあつらんより江三廣光と常盛と俱して彼地へ遣はれ其の
りて義邦私に義秀へ一翰を贈るとも安否を問はんのかと答は
る小わがと評定衆ありはられうるより急せあやわらん常盛の朝
啓行とて其の準備肝要又多賀藏人の禁獄を免され其の義盛に領
れと既にその風聞あり藏人より其の如く冠者ハ其の罪のわたり
え疑ひ稍解かん本領安堵の日あり後憑くこと懇に告慰あつ懐かせ
卿教書を恭しくも披読し声爽は讀まされ義邦ハ其果て額つて頭と擡
仰謹て承りしに嫌疑の中よりを置はつて罪をゆるん欲と安んずる
假寐忽ち兩音淺く物せられ貴所の領りとなりと多し其の幸ひ某
の之飲藏人朝夷氏の親族の方より召菴らるるを思ひ不忠義の因縁
いんや亦越中へのかん使は廣光と俱せられ郷導くらん其の歡び譬は物なり
彼義秀の恩人越路へかゝる鴈の翅は一封の書を寄せよと欲許させ思
命ハ有るに辱く望足りぬとわたくし答ふと胤長はくち點頭あふ
宿所へ相伴ん後者の捕の程はわかれ物より整へんと心をつけし
卒ホとの皆退しと側人のものをたぬ當下義邦ハ篋姫共侶は廣光
武詮昌之蒙二郎と近づき密に相議する意外に其の恩命を疑ひ



水草り太郎

つぐ忠

城戸四郎

廣光

よ一郎



小袋坂の
新関の
武余を傳へ

兄弟の家を嗣せんぬるこの身を隠はと書遺してゆめおは往方おれを
父へ今も胸を潰して慚愧後悔甚しく一郷日鄰を騒いで日る往方おれ
索しども所在に絶えぬをばかりぬるやうに母と兄は死なれ又生別せ
る哀そのやうにもなくはくは親の家へあふとん影獲奉公
せむと尋思ふ親苗四郎は清勸を収め家へ事りしは年を往方おれ
親の齡の傾けはとありやうにゆめは里はせりて幾日もあつた痛
しはれは父の忘野のゆめを。その後弟の引太郎共侶刀野時夏が非
道の刃は忽地命を預けし打く冠者も誣られて加北へと走りぬる
いで先途は後めく稟る恩義は答んとあへば親の葬礼も親類は
うもはし浅良井の刀自母子は俱く若神の郷へ赴死又この春は冠者の
起し陸奥へ赴死し申斐あつた冠者は見参せし親の體言敵の
軀を刺して志を致しうも歡びは哀とありもかり再度の別離を
あて暮る来しものを得安うぬ主君俱せは追ひて恨みは後翼
あつたも舊里へ還りか。といふこの故に兄穗之助が孝烈の志を
羞むるは一合の田園でも阿容にとり親の迹を承嗣する本意を
あつたも。追弟と冠者の安否を外へ訪むるとあつたも。東の
都會の諸國の道俗多く聚合り徒は日を送るは似れど後はおれど
あつた絶えぬ兄が往方の終末をあらわん。曩は越路へ赴死し
又陸奥へ赴死し。といふ冠者は遭人又一つあつた兄は環會とありのやせと
心は占て起れぬ。いとも苦しめうと察しぬといひは頻に鼻を
うもはする人の誠は感激せし義邦篋姫は。誰がう獲る神垣の

挾壯虎の二二小四人の耳を傾けて頻に感嘆ありける中、義邦は
 感涙坐す禁るも、もて目皮をあらたし、連微妙に蒙二郎初家付
 比、まづりふもあつたり。ふ家の艱は忠孝願れ雪の中は松柏の操を
 このまじり現るの弟中、彼兄あり匹夫の志を奪ふべし。あつて望む
 是より。この地は足を駐る可、惜路錢を費はし、兄に遭はし、その益を吾儕の
 為にも絶つべし。たゞともかとも舊里へ入るべし。決て要るに鎌倉を
 送り、よりまゐる武藏の太田の莊に赴き、光仲の内室と交え、且見
 姫を慰め、彼婦人の薄命を親廣綱に捐らし、良人の不測の罪を
 ゆり老黨間中守直に先へて還るといふ。當中の沙汰定むる風聞
 紛紜、人々を愁傷させ、想像する。ふきその良人の留守は、毫も
 訪はる。いふ面をあらたし、蓮姫の女ども、これに消息を、彼地は到らば、
 豫て相識る守直あり、心も安き。く、飲め、酒められ、彼地は到らば、
 且見姫の資と、けふも夫婦の龍居は後人より遙に勝る。蓮のいふ
 みを問いて、姫は歡げ、よきとあつて、あつてつせぬ。世は類に憂ふ、夫のやうに
 侍りて、猶慰る。あつて、あつて、幸ひ人の幸ひ、安も増え、ひめ、彼方
 ぶ、此痛り。さう、對面せし、ゆき、間中隼人が噂して、名を、あつて、
 ともかく、計らせ、と、回答、あつて、廣光、四人も共、感佩、く、安危の巷、在、あつて、
 朋友の、美、敷、く、ひ、その留守、も、訪せ、あつて、忠操、あつて、現、蒙二郎、
 相、た、た、の、使、も、辞、は、あつて、その、つ、く、蒙二郎、初、家、付、
 善後、鎌倉、日、を、送、る、も、在、柄、の、弟、に、赴、き、冠、者、は、見、参、さ、く、あつて、何
 地、あつて、守、定、め、兄、穂、之、助、は、遭、人、と、あつて、難、た、あつて、仰、は、は、い、あつて、
 あつて、七、太、田、の、莊、三、十、里、の、あつて、秋、月、下、野、は、在、あつて、鎌倉の風聞、

被地へいさくせえん陸奥之宿志と遂に朝夷と多賀殿と内外より賊
柵を攻落しあやうこの西内賜められずや越路へは邁進く太田の莊へ赴くとも
思ふ答ふ志の道も難かたしかれ主命のゆゑに本意も協へり然
消息を急せんと愉承引く遠く退却料紙硯を惜しむ塵埃を吹く
あつたは蓮姫歎かて墨磨りて走書あふ程は義邦も一通を寄
贈ふふそふ筆ぞと深ううかて夫婦二通の書翰を授けし封し
蒙三郎ふこれと遞与てあつた口状を云云とあつたは打られ迎の轎子来り
そそ荏柄の家謀業内く布の慢幕引送りきと促さ義邦馳て身と
起て蓮姫共にも俤頼立られ轎夫が擡も二挺轎子嚴重は影の土
卒立集合て或は義邦と蓮姫と扶来し或は廣光継忠武詮昌之ホとち獲て
前駐後後の隊伍正しく荏柄天神のほろり第宅を投じしり出せば胤長も
後者多く抱く馬上ゆるり拍せりあつた殿を押さるるれば又下知を受
か月苗れる雑兵ハ城戸を解け守屋を毀く新関もろく廢られふこの名
人の往返も常のどくまやうさ程は蒙三郎ハ恍惚と追立られ候と
離別は堪はぬあつたの故主の轎子の後は跟々傷まれば追遣られて
あつた邁進は其処ともあつた荏柄の社頭まであつたれば前面ハ胤長
門の守の緊しくあつた内へ入れ後又今頃は朽きく懐惘と
立在程は長兄夏の日もあつた常よりあつた黄昏も林もあつた鴉もあつた
あつたはあつたが今宵ハ小町のほろり客店に宿投りあつた且く追遣り
荏柄の社に詣つ義邦の母異を祈る胤長宅地の邊を徘徊し又若宮路
和田義盛の第を觀る市中の風聞を撈る荏柄平太胤長ハ和田氏の庶流
あつた義盛の後弟とあつた第ハ柳營の東荏柄の前面にあつた時ハ異稱て荏柄

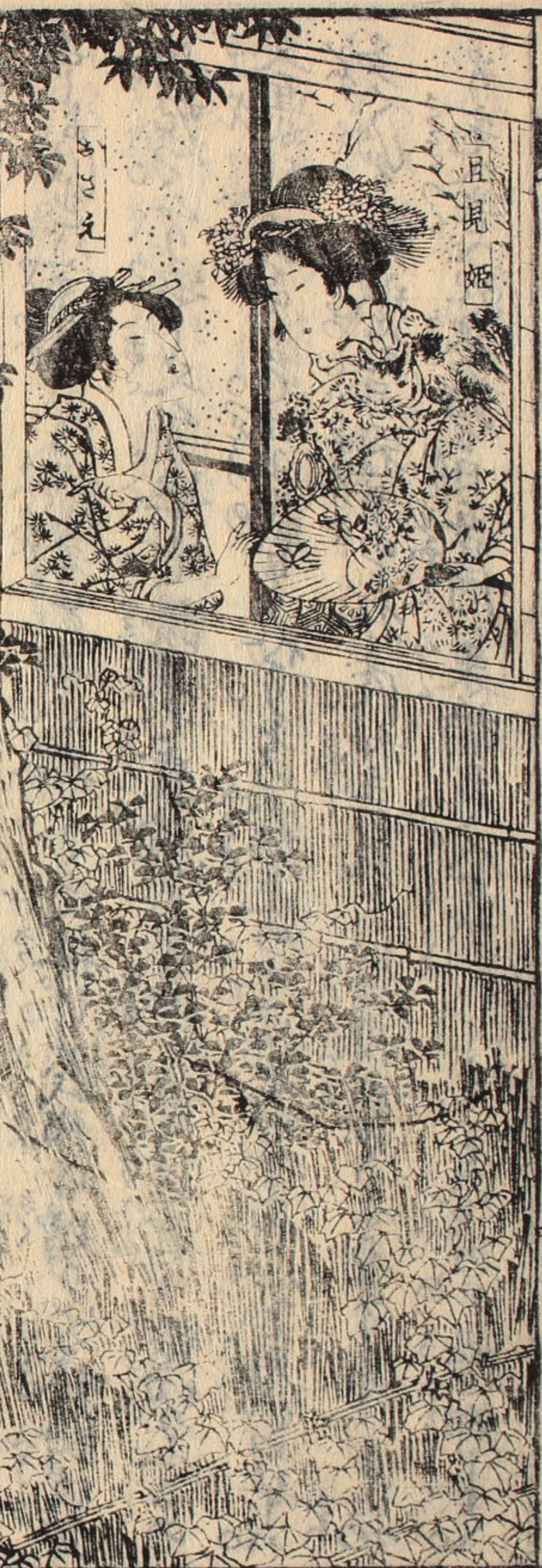
平太と喚做す。抑義盛の祖父を義明といひ三浦大介是なり。義明の嫡子と和田
太郎義宗といひ是則義盛の父。義宗の季弟と和田平内義長といひ義長の家
男ハ則平太胤長之胤長。その性名を好む客を愛ひて大なる文藝あること
武術。其世の爲傑と文を身の樂とてあそぶ。圖るに吉見主従を領けられ
面目よくその款待の意を用ひて守禦の士卒を遠く坐し。其時鎌倉宿老の功臣
やにあらう。又光仲を領けられる。和田左衛門尉義盛ハ當時鎌倉宿老の功臣
あり侍所の別當。その性親戚は敦く人への善を稱へ弱を助け利の
爲より久し。惜しか識量明なり。決断は疎く。さうと光仲が罪戾ハ皆是
実なり。評言をんと人もいひ我も之ハ嚴命己とていひ。これを宿所召輩とせし。
罪人として執板せし。東面を福房は光仲を安措し。その屋より外へ懸つけし。
家康とて其城を其甲とて。老女とて男童二人を果せし。その所要と違ひ。
そのあり。光仲が文武の才長。その大功のむかし。其時且も手義秀とて
浅く。彼を助け。又義盛の嫡子常盛ハ義秀を徵聘のせし。使とて五月
廿四日の朝未明。老黨腰越。戰六郎。小後者多く。且郷導の爲江三。廣光と
相携。越中國。婦負郡岩神の郷民。相向。判五。宿所を救。起。なり。さうと
廣光ハ廿三日の甲夜の間に義秀は。田々。義邦の書翰を受。収。在。柄。私。卒。ハ
護送。せ。和。田。の。第。へ。赴。け。り。常。盛。就。て。對。面。し。郷。導。の。事。を。尋。ね。し。
光。仲。ハ。召。輩。に。せ。し。其。の。室。は。あり。と。も。い。ひ。あ。る。人。は。同。心。に。し。の。あ。れ。は。懷。ひ。を。臥
房。の。紙。障。又。房。櫳。の。伊。与。簾。は。之。隔。られ。次。の。日。越。路。へ。赴。け。り。と。蒙。二。郎。ハ
これ。の。風。聞。を。彼。に。問。ひ。し。は。さ。う。と。い。ひ。僅。く。心。を。安。く。し。遂。に。鎌。倉。を。も。と。り。て。武。藏。の
太。田。へ。急。ぎ。五。月。廿。九。日。の。日。未。下。刻。既。に。件。の。里。に。あ。る。人。は。同。心。を。隠。れ
お。た。廣。綱。の。莊。院。を。衡。門。を。向。上。れ。甲。門。の。扉。銷。固。く。角。門。の。も。些。開。り。時。夏。の

太田の莊子
且見姫と
訪ふ

月夜に編み



同中ノ集



朝朝五續卷三

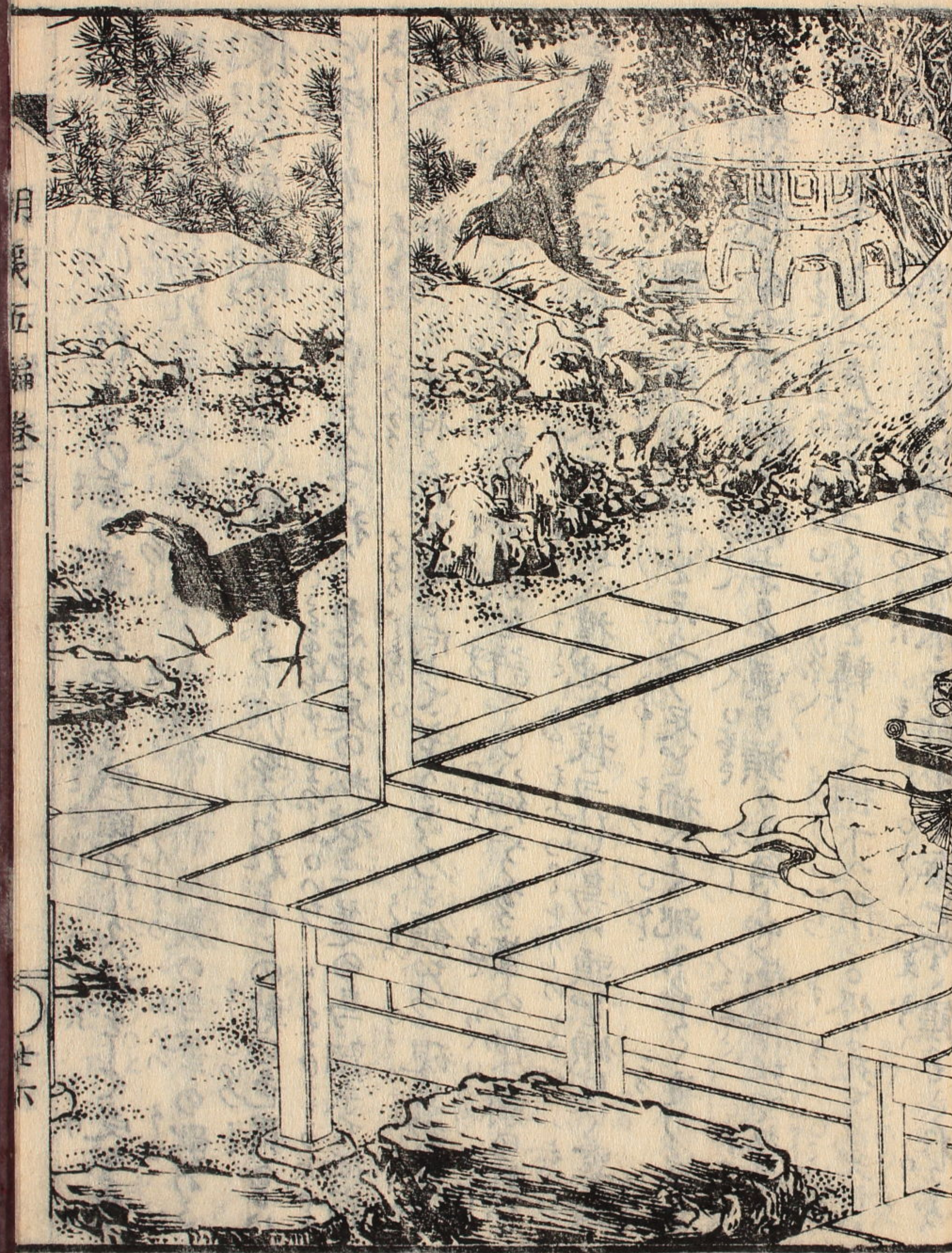
十

中より隠し人のうろくを掃りかきし況ありは冷々し妃婦人は秘密を委の
かば毛を吹くを疵を求めん。さう簡よ及びび。且くあひきりえといれて姫
を落涙を拭ひぬ。蒙二郎は後方より守直が袂を引て事を
あく執り人へ慰められどさう又功もなりと浅きもの僕を助言よ
似て鳥辭がゆく痛痛くおれんと且試は打せし扇のうら姑く措て校枝あ
状なり。今宵僕は遽と然ハ明曉も立ち鎌倉へ赴ふ校枝との使と
稱さば和田の第へ出入はる。究竟の便宜よりやその成るはとも此の
殿の安否をきん。かきハハハ。と真実もくくも相譚へ。守直直且く按く
莞尔と笑。和主の尋思大なり。さうばあづ八素とてあてて後同翰を
えく又考て被見像見を遣されぬ失ふん。さう彼処は赴くとも人毎にを
用ひて叔母へもあれ外人は太田の郷より来るなど必し。いづれと喻せ
心し。ハハ肝要のさう。又その文も肝要あれ。く綴りて微笑。校枝を
羞て立んと。守直急なる。さう叔母のさう。彼処のさう。何れと問糾
ま。紛れあさる。い。あ。さ。れ。ハ。商量既ハ整ひぬ。且見姫歡びく文の綴る云。云。
校枝はあさる。い。あ。さ。れ。ハ。物整んと遽。く。あ。が。部屋を退り。さう。校枝ハ
且見姫の誨の随ふ。さう。文。と。さう。か。や。う。写。さ。土。産。も。些。一。紙。を。甲。夜。の
間。は。蒙。二。郎。は。遽。と。さ。う。い。ハ。蒙。二。郎。ハ。時。ハ。六。月。の。上。旬。翠。天。涼。し。星
月。夜。鎌。倉。と。さ。う。起。り。て。只。管。急。ぐ。程。は。僅。に。二。日。半。中。若。宮。巷。路。の。東。角。
和。田。義。盛。の。第。は。着。ぬ。且。く。さ。う。い。ハ。尻。掛。酒。肆。は。立。ち。て。飲。食。は。酒。客。が。
雑。談。を。側。聞。は。る。さ。う。方。さ。の。噂。と。さ。う。心。は。か。さ。さ。う。い。ハ。遂。に。件。の。事。
後。門。より。進。み。入。る。と。百。五。六。十。歩。中。門。あり。さ。う。其。処。より。入。れ。前。面。ハ
圍。門。より。一。枚。九。尺。の。檜。戸。を。さ。う。さ。の。戸。は。又。樞。戸。あり。その。前。つ。ハ。板。席。し。

右邊よりある守屋あり番卒二人飲入飲入り付の板間の柵際よりあるハ
土間の母屋は孫相の附くある大に板戸二枚ありこれを左右へ開たう。
板席のほりある燕脂白粉掃箒と鬻ぐもの物の本と貸て世渡りある高麗
物彩色僧團扇など鬻ぐもの呉服太織の絹を鬻ぐもの多くの商人ハ所
挾たて聚合する局方あり女の子共幾人入り或ハ二の柵間のわきう
真白の半面をあらうく潜るものあり或ハ著く蠅のどく商物の重櫃
小葛菴のわきうに立て掛る物を買や或ハ主の使をうけあうものある
上総木綿の單衣被て右の赤朮葱に太やち切幾重の袴の締る草
書匣と携え左の青張の日傘と引提げ遠く遊ばせたり或ハ鹿
栲の前禪を精悍にけは端折る女の子に一俵の炭と四五束の薪をと
輕きに左右の引提ぐ内に入り又隅に居るものあり現の館の
ある和田左衛門尉義盛ハ鎌倉創業の功臣ゆゑ米地ハ信濃にあり又
相模あり且侍所の別當に自然ハ華やか米をその威福傳ふる人
あぬと小家ハこれとなく美大姓ハこれとなく婿とある人況都會に
田舎見ハ朱門白壁の目輝け凡牆石甃の足は垣ををてハ紫微玉殿入り
秋と怪に閨閣後堂の欄干に嬪娥霞被の輝娟を値てハ女國麗農を遊
秋と疑ふ人蒙二郎ハこの光景を呆れあへぬ入る且外門は立
在ハ商人ハ退れ去り婦女輩もどけりぬ折ををれ進みゆくある人
裡面より老う執接人立せくる来るを同糾ハ又その果の刺ををる人
つ受くる要時ある人といひゆくぬる裡面を入りくる。かくて又蒙二郎ハ後
と一時あつた此度の色々と黒く脂肪つたる女の子守戸が報簡を
あつた彼局に使者炊爰あつた蒙二郎とせんやうを武藏の使者

態はあつく無異と祝し、蒙二郎は遠く汗を拭ひ足と洗ひ、校枝守房
回翰を祇包と違与より校枝はうく歡び、途の疲勞のあらわれども
姫へのほろへ事く被処のすの趣と口親あり、あつと他するくへハ
あつとほろへ事く被処のすの趣と口親あり、あつと他するくへハ
体又被回翰とより、梓の趣と、霍乱し、心あり、浪谷の郷は
三日逗留せし、曲は報し、且見姫はうく、且然び且勞ひ校枝に
累の封と解く文と讀し、立野紙と、累の封と解く文と讀し、立野紙と、
老筆はれど美しく、初校枝が美を祝し、異を報絶し、人情を
述、訪れと教ふ、収次の條は、近より多賀殿の、由縁の方
がよ、給事あると、秋より云云と相彈れ、松も走ると、あつと、
僕へ幸ひは、彼君の冊を、隷られ、あつと、
守禦の兵を、ハ置れぬ、あつと、
罪は、あつと、
障り、あつと、
あつと、
物、あつと、
器、あつと、
る、あつと、
か、あつと、
立つ、あつと、
倉へ、あつと、
病後、あつと、

曉れく被処は面置れか、衆弥勒の世を歴ともし、復はすいと難く禍
れより起らん、彼君達の御運も竭せ、命數も餘りあれば、あがいて難
陥り又、端らぐ脱れり、秋之よりあふべしと、ひとりあは慰めて歩の運びを
あむれが寺より撞く鐘の數七、今秋今春路の和田義盛の新算、倏忽走り
著あり、案下某生再況多賀藏人光仲、裏に重忠の直言を、僅に禁錮を寛
れ義盛これと領りて、籠居よ、毎日數経れども、原是冤枉れば、義盛竊に
愛顧て守禦を、後心に用ひて大さかたのせし、美里の苦辛酷く、わが
あけ幸は似れども心の憂やうも、く廣細の往方且見、姫のより或は義邦
義秀のより彼とく、せとく、せとく、物や、夏の日消し風かよひ、下晡より
り浩処は、この日属わ、義盛より、隸より守戸の老女、尚うみく、新算の
り、鄭より、渡り、光仲のより、前日舊算、在り、程、夜、支、が、高、は、書、で
り、云、云、と、頼、は、そ、い、も、の、も、と、あ、つ、告、て、渠、は、が、姪、の、り、を、回、報、せ、趣、を、見、え、又
り、あ、つ、て、渠、復、使、を、り、太、田、の、郷、の、姫、の、の、兒、消、息、を、寄、居、り、折、り、四、下、に
守、え、あ、れ、が、届、あ、る、は、る、は、る、を、あ、か、く、お、父、と、賜、れ、と、真、実、に、け、は、且、見
姫の消息と、服紗包と、う、あ、は、光、仲、の、氣、色、も、ね、く、寔、は、ま、の、浅、く、ね、く、
あ、い、ひ、を、多、く、譜、せ、れ、く、罪、蒙、り、と、知、り、あ、つ、世、も、人、も、も、憚、り、で、る、所、は、と、ま、る、と
久、且、見、お、い、と、あ、れ、を、あ、れ、守、直、これ、を、知、り、て、禁、ひ、死、る、あ、る、は、さ、い、あ、つ、く、
あ、ろ、め、く、く、く、局、且、見、姫、は、使、を、校、技、が、あ、る、叔、母、の、り、と、飲、亦、是、不、思、幾、の
宿、縁、之、輒、く、渠、は、相、譚、れ、く、これ、の、執、授、せ、る、は、あ、は、浅、く、の、忠、心、を、と、
飲、之、き、ま、あ、れ、も、光、仲、の、期、は、及、び、く、女、子、の、あ、ろ、を、引、れ、は、密、翰、の
贈、授、せ、り、人、の、い、ふ、く、と、あ、る、は、死、く、も、羞、を、雪、り、と、あ、ろ、の、終、は、返、し、と、
他、ろ、く、あ、ろ、と、あ、ろ、の、い、ふ、く、と、あ、れ、理、り、は、な、い、と、あ、ろ、の、情、人、の、あ、ろ、を、好、色、と、い



一器の饋
もの偕老の
契りを疎く

これバ田新ゆいんだあれどもその言の葉はもろもろ誠まこと頭あたまれい疑うたがひく受うけをあ
披ひらきそれバ紛まじれもあ尺素ふしそ且見みがも蹟あと中うち前司殿ぜんじどのの自筆おのひの歌うたわ
像見ようけんの扇あふぎと添そえれいひ疑うたがひくもあれどもこの鮮あざの色いろ異ことな
と怪あやしやうとあれどもとる折をり忽たち地庭ぢぢやうの松枝しょうし一隻いっしやうの鳥とり朝あさ来きたて栖宿きしゆく
餌え欲ほけぬ教鳴きやうめうう光仲くわうちゆうこれと遙とほく向むかひてぞうあろは領りやうだろ硯えん喜きの刀たうを
連つく取とれんとほ有あ繫けふ寸鉄すんてつと許ゆるさば細こやう筆ふでの轉くる解との鮮あざと
突つ幸さいだろ三四さんしうあれども巻石まきしの邊へ撲地ふちぢと投なげれば鳥とりハ頭あたまと傾かたけく霎時しやくじ
さややうく飄ひうと翔降しやうかうの四下しげとええり足あしと揃そろへく跳はぶぶく近きつた
件けんの鮮あざと横よこなる喙すいと樹上じゆじやうより還かへり頻しきりは角かくく枝え撞つた忽たち地ぢ咬く
盡ははとええ鳥とりハ一声いっしやうと鳴なぐ身みと轉くるて樹下じゆげへ墮おる候さうは死しでり光仲くわうちゆうハ
この形迹かたち小愕然せうがくぜんとくち驚おどろけ原來げんらいこの鮮あざを毒どくと加く饋くふこれこが
眼め力の登のぼり婦人ふじんの為ため害がいせられん嗚呼めいこ危あやしき現げん七しちの子ことバ
生なまとも婦人ふじんああり緩ゆるいといふ鄙言へいげんはれやああり察さつさふ且見み姫ひめハ月つき
うの留守くしうの程察夫しやうさふは心惑こころふこれと鬱悒ふさふさやあありかく不測ふそくの罪蒙ざいもうのく
今いまこの鎌倉かまぐらは筆措ふでれども飽あは遂つひにあまの毒どくとく害がいと後ごをせく
せがやと計はかりし疑うたがひけ這奴このやつ憎にくむと心こころの中うちは丸彈まるだまだく疾視しやくし詰つめる飯いひ
鮮あざハ途みちは人ひともさういふくわあれと夢ゆめやどもああり哀あはれ早はやく光仲くわうちゆうハ
怒いかど飲のめ膝立ひざたて直ただく意いれぬ愚ぐ知ちり富貴ふきや他人たにんも聚あつまり食く賤けんの親おや
族離しゆくりこれハ存亡そんわう不定ふていの罪人ざいじんとありより妻子しよしも疎そる今いまは亦また離りるあ
縦たて且見みが奸夫けんぷと知しるとも身みハ拘これてあま在あり憎にくむと何なんと何なんと且見みが
不義ふぎの罪重つゝもくも前司殿ぜんじどのの恩義おんぎハ高たかうそれや辛つらく脱だつとて余あに恙やむあ
舊ふるの井平いへいだんのと夫婦ふうふの縁えんも是こゝろ今いまより離別りべつの状じやうと取とりて披ひらき

糾^ひつゝ妻とあつてもう脱^{はな}さん彼奴ホ夫婦のそつと年米娟^{うづ}くあひあひ。
要拘人義盛^{よしなり}えふこれをもと罪^{つみ}と落^おさバ稍目上の贅脱^{ぜい}く心地あるやうぞ。
これ聞^きせとさしあはせバ時政ハ鼻紙盤^{はな}の眼鏡^{めがね}を把^とく件々^{けんけん}を見つ見尋^{みぐみ}
思^{おも}くあつゝの證據ありとふとも思^{おも}く流罪^{りゅうざい}のめづあつゝその妻子の消息ハ
許^{ゆる}さる例もあり譬^{たとへ}ハ今光仲ハその類^{るい}あつゝあつゝこれハるゝ創業^{そんぎやう}を補佐^{ふさ}臣^{しん}
將軍の外戚^{ぐわい}ある婦人の密書^{ひみつ}を偷見^{ちゆうけん}と云云と計^{はか}らる諸老臣^{しよらうしん}は拔^はせられん
況^{いは}忠能^{ちゆうのう}負^おハ光仲^{ひく}を具^ひ負^おめめと子義時^{こぎじ}の肚裏^{はら}も今さうふ拂^はり
どし渠^{かれ}りあつゝ必禁^{かな}めん又義盛^{よしなり}ハ故老^{こらう}の大紳^{だいしん}その族黨^{しやくたう}多^{おほ}くが聊^{りやう}科^か
負^おけとも一朝^{いちやう}ハ什^じしと就^{しゆ}くこれ謀^{まう}ありそれを移^{うつ}す法^{はう}をいふ又刃^{やいば}を
以^もて憎^{にく}むとあつゝ光仲^{ひく}奴^{やつ}と今宵^{こんしやう}の中^{うち}に殺^{ころ}さしその謀^{まう}ハ箇^こ様^{やう}くと耳^{みみ}と
引^ひつてと示^しせ其^{その}牧^{まき}の方^{かた}感服^{かんぷく}と歡^{よろこ}むと大^{おほ}くおどろけ且^{かつ}見^み姫^{ひめ}の副翰^{ふくかん}ある
その二番^{にばん}の蚌^{はう}の中^{うち}へと酷烈^{こくれつ}ある毒^{どく}を加^くえと極^{ごく}糝^{せん}あつゝ舊^{ふる}のどく
服^{ふく}紗^さも包^{つつ}も又折^お戸^とが縛^はつて断^つ折^おる封紙^{ふうし}も似^につゝ白紙^{はくし}もその八素^{はつそ}と封^{ふう}
扇^{あふぎ}を巻^ま菟^う奴^{やつ}偽^{いつはり}筆^{ひつ}とさしほめめその標署^{ひょうしよ}を写^{うつ}しは彷彿^{ふふつ}とてぬれと
真^まいづれと贗^{おと}とさしぬれとがく内外^{うちと}の重封^{じゆうふう}皮^{かわ}も思^{おも}く初^{はつめ}異^いあるとあつゝ凡^{おほ}
一時^{ひととき}をさしと梓^し全^{ぜん}く修復^{しゆふく}果^はと折^お戸^となも機密^{きみつ}ハあるとだるゝと氣^け
あつゝ召^{めい}すゝと汝^{なんぢ}が愆^{とが}の痛^{いた}痛^{いた}さうちも措^おれに苦心^{くしん}とさうちもあつゝ好^{この}
それな舊^{ふる}のどくあつゝかれこれとさる使^{つか}わら只^{ただ}云云^{うんぐん}といひてこれを
返^{かへ}せう。あつゝとこの封^{ふう}と披^ひれあつゝとあつゝと暖氣^{だんき}やもあつゝと使^{つか}
鈍^{どん}く受^うめとさうちも去^さわバ又知^しらせよと己^{おの}が伎倆^{ぎりやう}を思^{おも}ふ被^おけく真実^{まふし}一
け分^{ぶん}付^{つけ}れバ折^お戸^とハつゝと歡^{よろこ}むとあつゝと忘^{わす}れと要^{よう}安^{あん}時^じも措^おれに軀^くて件^{けん}の
一包^{いっぱく}と引^ひ提^{てい}て退^{たい}れと執^{しつ}接^{せつ}人^{にん}ハ云云^{うんぐん}といひせと蒙^{もう}二郎^{にらう}返^{かへ}せと牧^{まき}の方^{かた}を

彼使が異議あり受てて去りしと折戸が報ふ不承なり又時政が告ふたがもを
 わるゝと舌を吐く耳笑つて點頭する時政夫婦の奸計は既にわくのかれども義表の
 離山のあかきと長唐櫃四箇を光仲を罪に陥せしめ平人ハいふも知らず
 奈何と傍るべし。されば又蒙二郎ハ彼時只義盛の轉第せしむるをてその
 舊第へ移りしものハ時政の事を知らず又且見姫の饋物ハ鮓の鮮味を
 いかんと思ひ後悔をれども包り封も舊の如くて異なれどもわづれは遂に不覺小
 欺れと再これと携つて今巷路を義盛の第へと赴けり。されば光仲の眼力
 凡庸にあれども猜し試みるの害を避れども是より其の疑ひ只且見姫の
 久し係りし憐れし薄命の貞婦徒に冤を抱て憂苦を耐ふ由かき人救畢竟
 蒙二郎太田の宿所へかへり来て又甚だしく説話あるハ次巻の解分をみて
 朝夷巡鳴記全傳第五編卷之三終

續皇朝戰畧篇

全五冊

此書正編ハ五三行ハ久シク且盛ナリ而メ其近世ノ戰略ニ於テハ既ニ卷了リ紙數充リ
 以テ記スルノ能ハス故ニ今綴先生ニ乞ヒ新ニ統編ヲ發見スル所ニ其記載スルヤ文化
 年間魯西亞人蝦夷地ニ入寇スルニ始メテ來大和長防又西東ノ戰ハ王師東征尋テ佐
 賀台灣ノ諸役及ヒ朝鮮江華島ノ捷ニ終リ其中大小ノ戰戰將勇士ノ奇勲偉功ヲ
 洩スル無シ即チ兵家必讀ノ書タルハ言フ俟タズ今日開明文化 由テ興ルニ所以スル者
 マタ戰ヒニ出レハ人ノ尊卑ヲ問ハズ有ハ此書ヲ閱セサル可ラス四方君子幸ニ購求シテ
 其奇書タルヲ知リ玉ヘト云フ

大坂書肆

文樂堂

前川源七郎謹白

右書各府縣下普々書林へ輸出有之以間御手寄ニテ御購求下サレ度ハ

